

## ボーノのともだち

宇検村立久志中学校 一年 要 凱仁

ふなこし小中学校に一本の大きなアカギの木がありました。アカギには、いつも一匹のキノボリトカゲがいて、名前はボーノと言いました。ボーノの体はこげ茶色で、とても小さく、他のキノボリトカゲとは、まったく違っていました。周りのキノボリトカゲたちは、ボーノのことをいつも馬鹿にしていました。

「お前は、かわいいそうだな。地味なこげ茶色の体で。俺たちの鮮やかな緑色を見てみる。しつぽの先までかっこいいぜ。」

ボーノはいつも一人ぼっちでした。友だちがほしくて、キノボリトカゲのリーダーに何度もお願いしました。でも、

「俺の言ったことができたら、お前のことを認めて、友だちになってやるよ。」

と言って、とてもボーノができそうにないことばかり要求してきます。ボーノは一生懸命挑戦するのですが、成功するはずがありません。それでも、ボーノはいつか友だちになってくれると信じて、何度も何度も挑戦していました。

「おい、ボーノ。俺たちと友だちになりたかったら、まず人間と友だちになってこい。」

今日もリーダーが無理な要求をしてきました。「人間」と聞いて、ボーノはぞつとしました。小さい頃に、「人間」に追っかけ回されて恐い思いをしたことがあるのです。

「いやな顔をしているな。無理なのか。」

リーダーがにやにやしながら言いました。ボーノは、大きな声で、

「そんなことないよ。絶対できる。」

と「人間」がいる校庭に向かいました。

人間たちは、校庭を「わあわあ」言いながら走り回っていました。「どうやって友だちになればいいのかな。」

ボーノは校庭のすみっこから、こっそり観察しながら考えていました。すると突然、体が宙に浮き、

「わあ、キノボリトカゲだ。」

「本当だ。見せて見せて。」

と怪物のような大きな声が聞こえてきました。どうやら、人間がボーノを見つけて、つかまえたようです。ボーノはまっ青になりました。「これじゃあ、友だちになるどころか、ペットやおもちゃにされてしまう……。」人間につかまえられたしつぽは、痛くて痛くて今にも、ちぎれてしまいそうです。

「やめなよ。かわいいそうだろう。」

さっきの怪獣のような声とは少し違った、おだやかな優しい声が聞こえました。そして、ポーノは温かくてやわらかい大きな葉っぱのようなものに乗せられました。

「まさや兄ちゃんだ。怒られるぞ。逃げろ。」

ぎゃあぎゃあ騒ぎながら怪獣たちはあつという間にいなくなりました。ポーノは、アカギの根っこの近くにそつと降ろされました。

「ごめんね。またつかまる前に早く逃げて。」

そう言葉を残して少年は去って行きました。ポーノは思いました。「人間と友だちになるなんて、本当に命がけのことだな、恐くてもう二度と近づきたくないよ。でも、ぼくを助けてくれた『まさや』という少年は優しいし友だちになれるかもしれないけれど。」

それからポーノは、アカギの木陰からまさやのことをずっと観察していました。勉強をしたり、校庭でサッカーをしたり、まさやはいつも楽しそうでした。ポーノはその様子を見ていて、「友だちがいるっていいな。」とますますうらやましく思うのでした。

ある日、ポーノはいつものようにアカギからまさやのことを眺めていました。すると急に、学校の近くの山から「バキバキバキ」とリュウキュウマツが折れる音が聞こえてきました。それと同時に、山に住む生き物たちが

ばたばたと避難する音が聞こえました。ポーノは小さい頃から、誰よりも耳がよかったので、遠くで起こっていることにも、すぐ気付くことができるのです。「どうしよう。土砂崩れがくるかもしれない。」ポーノは、真つ先に学校にいるまさやのことが気になりました。「きつと人間たちは、このことに気が付かない……。」ポーノはすくつと立ち上がり、学校に向かって走り出しました。

「今度はぼくが助けてあげなくちゃ。」学校の玄関に飛び込むと二階を目指して進み始めました。まさやが二階にいることは、毎日の観察のおかげでよく知っていました。ただ、二階にいくためには長い階段を上がらなくてはいけません。ポーノは一瞬戸惑いましたが、すぐに名案が浮かびました。「そうだ。壁を登っていこう。」ポーノはキノボリトカゲ。登ることは大得意です。壁にぺたぺたと張り付いて忍者のように登っていきます。あつという間に二階に着くと、まさやの教室に飛び込みました。ちようど昼休みで、まさや以外の子どもたちは外に遊びに行っていました。まさやは一人で読書をしています。

「あれ。アカギに住んでるトカゲくん。」

ポーノはまさやの机の上に乗る、必死で土砂崩れのことを伝えます。でも、まさやは「外に出して」と言っていると勘違いして、ポーノをすくい上げるように持ち上げました。「どうしよう。このままじゃ、伝わらない。」ポ

「ノはじたばたして、必死でまさやに伝えようと思います。やつとまさやは、「このトカゲくんは何かを伝えようとしていられるのかもしれない。」と気が付きました。もう一度、ボーノを机の上に乗せ、伝えようとしていられることを考えてくれました。でも、なかなか伝わりません。ボーノがあきらめかけたとき、教室の壁に新聞が貼つてあることに気がきました。それは、まさやが国語の時間に書いた新聞で、自然災害についてまとめたものでした。ボーノは、新聞のところまで行き、何度も記事の周りでジャンプしました。まさやは、

「もしかして、自然災害が起こることを伝えようとしてくれているの。」

と気付き、山に向かって耳を澄ませました。ゴゴゴッと遠くから音が聞こえてきました。まさやは、大急ぎで友だちや先生たちに、このことを伝えるに行きました。すぐに屋上に避難したので、校庭で遊んでいた友だちもみんな無事でした。まさやがホッとして、ボーノにお礼を言おうとしたときには、もうボーノはいませんでした。

数日後、キノボリトカゲのリーダーがボーノに聞きま

した。「お前、人間と友だちになれたのか。」

ボーノは少し考えてから、こう言いました。

「なれたよ。」

「よかったな、俺たちの仲間にしてやるよ。」

とリーダーに言われて、ボーノは、

「ううん。もういいんだ。」

と笑顔で言いました。実はあの日以来、毎日まさやがアカギの木陰で本を読んでくれるのです。そして、帰るときは必ず「また明日ね」とアカギにいるボーノに向かって声をかけてくれます。まさやと一緒に過ごす時間はボーノを幸福にしてくれるのでした。